東青地区統合校開設準備委員会（第２回）概要

日時：令和７年７月２８日（月）
１３：３０～１５：００
場所：県立浪岡高等学校　会議室

＜出席者＞
○委員
前田　済 委員長、岡　一仁 副委員長、岩井　友之 副委員長、
竹内　芳 委員、倉内　由理子 委員、八木橋　敏晃 委員、高田　万里子 委員、
對馬　牧子 委員、山内　栄隆 委員、常田　清彦 委員、工藤　裕司 委員、
櫛引　素夫 委員、加藤　文子 委員、今別　幸司 委員、白鳥　里恵 委員
○オブザーバー
県立青森西高等学校
山内　拓雄 教頭、山﨑　宏美 事務長
県立浪岡高等学校
野呂　和也 教頭、成田　美幸 事務長、高橋　朋己 教務主任

１　開会

２　事務局説明

第１回東青地区統合校開設準備委員会における主な意見

■　事務局が資料１により、第１回委員会における主な意見について説明した。

３　意見交換

（１）校名案の決定方法について

■　事務局が資料２により、校名案の決定方法に係る想定される決定方法のイメージ案及び論点等について説明した。

■　委員長が各委員に対して意見を求めたところ、次のような意見があった。

○　第４回会議以降、本委員会からの報告書に対し、パブリック・コメントを実施するなど、県民への意見照会の予定はあるか。
→（事務局）報告書に対する意見照会を行うことは想定していない。

○　同窓生から青森西高校という校名を残す方向はないのかと問われることが多い。これまでの統合校は基本的に新たな校名になっているが、青森西高校という校名を残すことは難しいのか。
→（事務局）本委員会では校名案を提案してもらい、決定するのは県教育委員会となる。本委員会が決定機関ではないということは御理解いただきたい。

○　前回、校名案候補を募集する対象は両校の同窓生と在校生、東青地区の中学生でよいと発言した。結論としてはＢ案（事後意見照会方式）がよいが、資料に「団体等への意見聴取の有無や方法は委員に委ねる」とあるので、例えば、浪岡高校側で生徒や保護者、教職員、同窓生などの意見をまとめ、それを委員の意見として提案すれば、浪岡高校関係の委員が６名なので６個の案が出せると思う。委員の提案という形ではあるが、関係団体への聴取を任せてもらい、５～６個の案を浪岡地区の意見として提案する形にさせてもらうと進めやすい。

○　Ｃ案（事前公募及び事後意見照会方式）がよい。校名案候補を募る対象は両校の同窓生と在校生、東青地区の中学生でよいと思うが、Ｃ案のように多くの方の意見や思いを取り入れることができればよい。募集後、校名案候補について、両校の在校生の意見を集約し、最終的に本委員会で校名案を３～５案に絞ることができるとよい。さらにその後にパブリック・コメントを実施するというのも一つのふるいになると思うが、そこまでの必要があるかは、協議の中で方向性が決まればよい。

○　事務的に煩雑にならない範囲で、多くの人の声を反映させるのがよい。ただ、浪岡高校は地区に密接につながっているので意見集約がしやすいが、青森西高校は南部地方から通学している生徒もおり、「多くの人」の捉え方に違いが出てくると思う。
　様々な人が直接自分の声を届けることができるということは大事であり、Ｃ案のほうがよい。

■　事務局が、校名案の絞り込みに当たり、応募又は賛同の多寡を判断材料にしない想定であることについて確認した。引き続き、委員から次のような意見があった。

○　東青地区の中学生から提案された校名案候補の全てを本委員会に提示した場合、絞り込み作業が大変になる。そのため、東青地区の各校に依頼して、各校で絞り込んだ校名案候補を私が取りまとめ、絞り込みを行った上で本委員会に２～３個の校名案候補を提案するのがよい。

○　それぞれの委員の話は、フィルターのかけ方が異なるだけで、方法としては同じことである。同窓会の意見は、やはり同窓会長が取りまとめてくれたほうが助かる。Ｂ案とＣ案の折衷案にはなるが、一人の委員がまとめて提案するということではなく、ある程度の委員が校名案候補を絞ってから提案するのがよい。そうなると、中学生の意見を吸い上げるには、やはり青森市教育委員会の力を借りる必要がある。高校側としてできる範囲で取りまとめるのであれば、同窓会長が周知して聞いた意見として同窓生も納得するだろう。加えて、中学校に協力してもらえれば、対象ごとに取りまとめた校名案候補が第３回委員会に提示されると思う。

■　委員長及び事務局が、両校の同窓生及び在校生については岡副委員長及び岩井副委員長が、東青地区の中学校に在籍する中学生については今別委員が集約して、それぞれ複数の校名案候補を第３回委員会に提案することを確認し、委員から了解された。

■　引き続き、委員から、両校の同窓生及び在校生並びに東青地区の中学校に在籍する中学生以外からの提案を可とするかどうかについて質問があり、委員から次のような意見があった。

○　統合対象校の学校運営協議会の委員という立場で本委員会に参加しており、同会の意見を踏まえた提案をした場合、同会には新青森駅の駅長など様々な方がいるので、両校の同窓生及び在校生並びに東青地区の中学校に在籍する中学生以外の意見を反映させることになる。できれば不特定多数ではなくても、その委員の属性に関係する県民などを入れていただきたい。

○　浪岡高校は学校評議員制度、青森西高校は学校運営協議会制度により、地域の方々の協力を得ているところもあるため、その関係者やＰＴＡの方々も対象にしてもらいたい。

■　委員長が、これまでの協議を踏まえ、各校の事情に応じて、両校の同窓生及び在校生並びに東青地区の中学校に在籍する中学生以外の団体等からも意見を聴取することができるということを確認し、委員から了解された。

■　引き続き、委員から、第３回委員会に提案する校名案候補の数について質問があり、委員長が、これまでの協議を踏まえ、各委員５案程度とする提案をし、委員から了解された。

■　委員長が事務局に対し、今後のスケジュールについて確認し、事務局が、第３回委員会において、両副委員長及び今別委員から各５案程度の校名案候補及び提案理由を提示してもらい、第４回委員会までの間に実施する意見照会の詳細について検討してもらうことを説明し、委員から了解された。なお、意見を照会する校名案候補の数を絞り込むかどうかは第３回委員会において検討することとし、引き続き、委員から次のような意見があった。

○　意見照会の対象はどのような方を想定しているか。
→（事務局）現時点では、特に制限なく、県教育委員会のホームページで意見を募集することを想定している。

○　各団体等が校名案候補を集約する段階で温度差が出ないように、本委員会における論点や協議の状況を踏まえ、募集の内容、方法、期限などについて記載された様式があれば、各団体等がそれを参考に校名案候補を募集しやすくなる。

○　「統合校が目指す姿にふさわしい学校名を提案してほしい」と依頼するようなものがあれば、最終的に提案理由は作成できる。
→（事務局）検討して、資料提供させていただく。

（２）特色ある教育活動の方向性について

■　事務局が資料３により、特色ある教育活動の方向性に係る論点等について説明した。

■　委員長が、「統合校に引き継ぎたい特色ある教育活動」を提案した統合対象校の校長である岡副委員長及び岩井副委員長に対し、提案内容の説明を求めた。

○青森西高校（岡　一仁 副委員長）

本校は文武両道の精神に基づいた学業と部活動の両立を推進しており、部活動加入率が昨年度は８０％、今年度は約７５％である。また、各部のキャプテンの中で国公立大学に進学する生徒が出るなど成果を残している。文武両道に基づいた学業と部活動の両立は継続していきたい。

続いて、おもてなし隊をはじめとする様々な地域貢献活動である。昨年度は４５回の活動に延べ４５７名の生徒が参加している。今年度は地域貢献活動を学校設定教科として定め、約１７０時間を校外活動の時間として設定している。この活動に対して単位を認定するという取組を、今年度新たに行っている。

さらに、青森西観光大使の活動を継続して行っている。特に今年度の修学旅行先で、昨年度のあおもり創造学で作成した津軽塗のスプーンを活用して青森の魅力を国内外に発信することを計画しており、この活動も継続したい。

他校との協働学習については、今年度、新青森駅に隣接している本校と同じように八戸駅に隣接している八戸西高校と協働した探究学習を計画している。また、櫛引委員の協力もいただきながら、数年前から長万部高校との協働学習も行っている。この活動は、新幹線が北海道に延伸することを見据えた活動である。

続いて、中高連携ということで、三内中学校、新城中学校と連携した教育活動を行っている。統合に向けて、浪岡中学校とも協働の学びを進めていく必要があると考えている。

また、高大連携事業として、青森大学、青森中央学院大学、青森明の星短期大学と協定を結んでいる。国公立大学とも連携を図りながら、活動を充実させていく必要があると考えている。

最後に、昨年度設置した学校運営協議会である。本校としては、浪岡地区も含め、青森市の西地区の持つ教育資源を生徒の学びに大いに活用したいと考えている。できれば中高連携に小学校も加えながら、小中高連携して青森市の西地区を一つのモデルケースとできるよう、地域の方々の協力を得ながら教育活動を充実させていきたい。

○浪岡高校（岩井　友之 副委員長）

まず、こども園との交流として、本校の運動会において、こども園瑞穂の園児と一緒に取り組む障害物競走を実施している。私自身、赴任して初めて見

たが、非常に素晴らしい交流であるし、生徒の情操教育にとても役立っていると感じ、どこの地区であってもこのような交流は非常に有意義であり、今後も継続したい。

また、コミュニケーショントレーニングとして、多様な他者と関わる機会を年間５回程度設けており、どこの高校でも実施できる活動ではないかと思っている。

さらに、コミュニケーショントレーニングの一環として、生徒から話をしたい先生の希望を聞き、その先生と会話する機会を設定する「浪高おしゃべりウィーク」という取組を実施しており、非常によい取組であるため継続したい。

また、本校には教養コースと商業実務コースがあり、進学や就職に対応できる学習環境を整えており、継続したい。

ボランティア活動に関しては、浪岡地区の様々なボランティア活動にＪＲＣ部をはじめとして様々な生徒が参加していることから、継続したい。

空き缶壁画の取組は、浪岡高校の校舎があって成立すると考えており、青森西高校の校舎で実現するのは難しいのではないかと考えている。浪岡地区で閉校後の浪岡高校の校舎を活用して継続できるような団体があればよいのではないかと思っている。

■　委員長が各委員に対して、両校からの提案に関する質問を含め、特色ある教育活動の方向性について意見を求めたところ、次のような意見があった。

○　第２期実施計画において、統合校における教育活動の例として、北畠まつりへの参加や空き缶壁画、バドミントンの活動について記載されており、また、統合しないようにという要望があった際にも同様の意見があったので、そのことを踏まえて教育活動について検討してもらいたい。

○　浪岡高校のボランティア活動に関連して、浪岡地区子どもの祭典というものがあり、この祭典は、延べ約２００名の中学生や高校生ボランティアがいないと運営できない。今年も多くの中学生や高校生に手伝ってもらったが、統合に当たっては青森西高校の生徒もボランティア活動で手伝ってくれるような機会があればよい。

○　青森市内の小・中学校ではコミュニティ・スクールの活動を取り入れているが、高校とも協力して取り組むとなったときに、小・中学校の委員が高校の会議にどのくらい出席すればいいのか、また、対象となる教育活動が校種間で異なる中でどのように活動するのか、などの懸念がある。

○　浪岡高校でも地域に根づいたボランティア活動に取り組んでおり、続けていかなければならないと思っているが、移動コストが課題である。新青森駅から浪岡駅までの鉄道運賃は往復６６０円と負担になる。そのため、公共交通機関を使わずに移動する方法など、生徒の移動についても考慮する必要がある。

○　引き継ぎたい教育活動に関してはどちらの高校も素晴らしいと思うが、青森市もこどもの数が急激に減少し、県立高校でも募集人員が減少するという現実がある中で、こどもたちが志望校を考えるときに、やはり１番は学力で、その次は学校の特色を見ることになると思う。

私立高校が無償化されたら県立高校と私立高校のどちらに進学するかというのが保護者の中で話題になっており、その場合は私立高校を選ぶという保護者や生徒が増えている。その背景として、やりたいことが明確に見えている特色のある学校に行きたいという生徒が増えているということがある。そのため、「この高校に行ったらこれができる」ということが一目で分かるような特色ある学校づくりをしたほうが、これからの県立高校としては強いのではないか。

今年の３月まで、私は青森南高校のＰＴＡ会長だったが、青森南高校が国際バカロレアの認定校になるのと同時に中学生の保護者から私への問合せが増えた。バカロレアの理念を見て青森南高校を受検したいという生徒が周りに多かったので、やはり分かりやすい特色を打ち出したほうが、こどもたちが行きたいと思う高校になるのではないか。

○　学校において、日本文化の中でも華道や茶道に触れる機会がほとんどないと感じており、全校生徒が華道や茶道に触れる機会をつくるような教育活動はできないのかと思っている。たった一度の経験でも、生きていく中で選択肢が広がる気がしており、是非、学校として意識を持ってもらいたいと思うので、統合校でできるかどうかということではないが、そのような意識を持った教育現場であってほしいと思う。

○　仮に統合校で華道に関する活動ができれば、進学したいと思う生徒がいるかもしれない。市内の中学校１９校中７校に華道部があるので、是非、そのようなことを考えてもよいのではないか。

○　県内に美術館が５館あるが、青森戸山高校が閉校になり、美術を専門的に指導する県立高校はない。青森県には５つも美術館があるのだから、そこで働ける人を育てる学科があればよいという意見を耳にすることもある。このような中、美術部などの文化部についても、こどもが志望校を選ぶ材料の一つになり得るのではないか、また、統合校は県立美術館にも近いので、そういった学びも考えられるのではないかと思っている。

○　アートはとてもよいポイントで、青森西高校は、近くにある三内丸山遺跡とは既に付き合いがあるが、県立美術館とはほとんどつながりがない。アートという観点では、阿部合成や常田健など、浪岡地区ともつながる。また、県立美術館では、サポーター制度によりボランティアもたくさん募集している。

さらに、新青森駅や三内丸山遺跡を含め、観光というキーワードでくくると大きな可能性が見えてくる。青森市内で観光というキーワードで地域をしっかりと見ている県立高校はないと思うので、青森市の西地区の要になると思う。そういう意味で、観光はポテンシャルが高く、新青森駅が目と鼻の先にあるのは非常に強力な武器だと思うので、特色として打ち出せないか。

○　統合校については、１０年前につくられた計画で普通科２４０名という型にはめられたもので、もう少し柔軟にできないものかと感じている。地域探究科を設置するなどすれば、これまで両校が取り組んできた活動を拡充させながら、生徒の学びを深め、地域に貢献する人財を育てることにつながっていくのではないかと思っている。コースや類型を設置しながら、ボランティア活動を単位認定するような仕組みを新たにつくっていかなければならない。

○　不登校傾向の生徒が増加していることを踏まえ、青森市教育委員会が多様な学びの提供に取り組んでいるが、県立高校においても、様々な生徒に対応している北斗高校では入学者数が定員を下回ることなく増加しており、教職員にも多様な生徒に対応した指導が求められている。そのような中で、統合校を普通科の単位制高校にするということも考えられるのではないか。単位制にすると、例えば年度途中で転学する場合でも、ある程度単位を修得した形で転学でき、全日制・定時制・通信制の併修ができれば、転学したとしても３年で卒業できる可能性も高くなる。ただ、統合校が単位制になったとしても、３学期制の青森西高校と同じ校舎で生活するのは難しいので、この辺りは一つの課題になる。教育課程の編成に関しては、時間がない中、本委員会で様々な意見をもらうというのは非常に難しいため、新たな作業部会を設置してもらい、先生方の意見や考え方を反映させ、新たな魅力ある学校づくりに向けて、特色をどのようにつくっていくか、早い段階から検討していければと考えている。

○　私自身、通信制高校で２年間教頭を務めていた経験からも、単位制の導入には賛成である。様々な生徒が増えている中、せっかく新しい高校をつくるので、何か特色があればと思っている。新しい高校が開設されるときに単位制を導入できないかと思っていたので、検討してもらいたい。

■　委員長が統合対象校の教職員等からなる作業部会において、教育課程について検討を進めてもらう旨を確認し、委員から了解された。

４　その他

ＷＧによる制服検討の進捗報告

■　委員長が岡副委員長に対してＷＧによる制服検討の進捗報告を求めたところ、岡副委員長から詳細をＷＧの構成員である本委員会オブザーバーの山内青森西高校教頭から報告してもらうとし、山内教頭から以下の報告がなされた。

○　第１回ＷＧを６月２５日に開催し、ＷＧの構成員と選考の方向性について確認した。その後、７月２２日に、制服取扱い業者４者に対して、新制服及び体育着の製造業者の選考への参加確認と企画提案書等の提出について依頼した。
　今後は、７月３１日を選考への参加確認の期限、９月５日を企画提案書の提出期限としており、その後、第２回ＷＧの開催を経て、９月１９日に選考結果を通知する予定である。

■　委員長がオブザーバーに対し、第３回委員会の開催に向けて、校訓、校章、校歌などの資料作成に協力を求めた。

５　閉会